

介護福祉学生の「一般企業・行政職」就職希望者に関する研究

－学習過程が意識の変化に与える影響－

谷 功

Research on Care Welfare Students who wish to get Jobs in Ordinary Companies or Government － The Influence of Learning Processes on Changes in Consciousness －

Isao TANI

Among students who enroll at training institutions with the intention of becoming a care worker, there are more than a few whose intentions waver in the process of learning on their training course and consider finding jobs in ordinary companies or government after they have graduated. This research implemented interview-type surveys on students (4 year course) at care worker training institutions who would be graduating in March the following year and who wished to get jobs in ordinary companies and government. From their opinions, the results suggested that while they had the following motivations at the time of enrollment: "there was someone close to me who required care at the time" and "it's a job that is required by society", they formed an image of their future during the process of learning and wanted to judge whether or not care work was a job that they really wanted to do so they had a cautious attitude towards and worried about this work.

Key words : care worker training, ordinary companies, care welfare students,
learning processes, hopes

介護福祉士養成、一般企業、介護福祉学生、学習過程、思い

はじめに

介護福祉士養成課程の学生の中に、介護福祉士の国家資格は取得するものの卒業後には一般企業、行政職等、介護福祉職以外の職種へ就職希望をしているものが決して少なくはない。介護福祉士養成校から介護関連分野への就職率をみると、平成16年では88.3%だが、平成19年には86.3%となっており、介護関連

分野への就職率は減少傾向となっている¹⁾。このような状況を踏まえ、介護福祉士教育の観点からは入学時の志がどのような学習及び体験の経過の中で変容してきたのかを押さえながら、養成教育という側面から慢性化している介護福祉職不足を少しでも解消していくために対策を講じていく必要があるのではないかと考えている。

考えられる理由として、18～22歳という自

1) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

らの将来について迷い悩む時期であることなど様々な要因が関連し合っているが、一概には言うことは困難である。しかし、財団法人介護労働安定センターが平成20年度に実施した介護労働者に対する就業意識調査²⁾での項目「働く上での悩み、不安、不満等について（複数回答）」の結果では、「仕事内容のわりに賃金が安い（58.3%）」「人手が足りない（51.0%）」「業務に対する社会的評価が低い（41.3%）」「身体的負担が大きい（38.2%）」といった回答が上位を占め、介護福祉職を取り巻く環境のマイナスイメージや将来への不安が、学生に与えている要因として示唆される。また、やりがいや希望といった不安を払拭するような精神的部分を学習として伝えることの難しさが教育上の課題点になると思われる。介護福祉士の魅力を十分に伝えることができてきたのか、というこれまでの介護福祉士教育の反省からも点検する必要性があるのではないかと考えている。

I. 研究方法

1. 調査対象

介護福祉士養成校であるA福祉大学（4年課程）に籍を置く一般企業、行政職内定及び希望の在学生4名（男性1名・女性3名）とした。

2. 調査方法

一般企業、行政職内定及び希望の在学生に対して、質問項目を設定した上で自由に発言を行う半構造化面接をグループインタビューで実施した。なお、発言された内容については調査協力者の承諾の下、ビデオテープに録画、録音した。調査日は平成21年8月3日に実施した。

3. 調査項目

一般企業、行政職内定及び希望の在学生に対する調査項目はつぎの通りである。①入学前、介護福祉士取得（課程）を目指した動機、②これまでの養成校での学習についてどのように感じているか、③企業または行政職への就職を決断した時期、④介護福祉職ではなく、企業または行政職への就職を意識したきっかけ、⑤決断をした時の気持ち、⑥介護福祉職以外に就職を希望した時の周りからの反対、⑦今後、介護福祉士の資格を活かせる可能性、⑧仕事を選択する上で大切にすること、⑨介護福祉士養成課程の大学に入学して良かったか、以上9項目とした。

4. 分析方法

各調査項目から出された回答の内容をカテゴリー化し、その関連性についてK J法による分析を実施した。

また、倫理的配慮として調査協力者の氏名、内定企業、行政先は一切公表しないこと、発言内容及び結果については研究目的以外には使用しない旨を口頭で説明し、了承を得た。

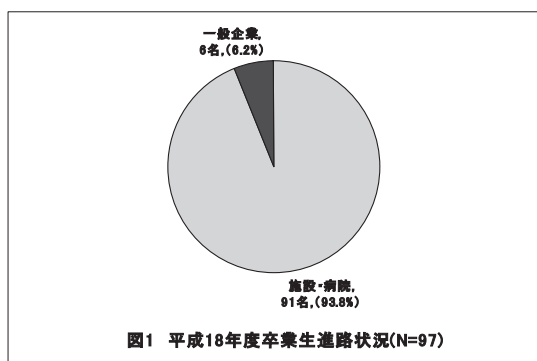
II. 一般企業及び行政職就職の介護福祉学科卒業生の現状

介護福祉士養成校であるA福祉大学（4年課程）の平成18年度～20年度、介護福祉学科卒業生計294名の進路状況について進路区分別集計をまとめ、その年代の傾向について考察を加える。なお、卒業生の進路状況のデータについてはA福祉大学進路指導部の協力を得ることができた。

1. 統計の整理

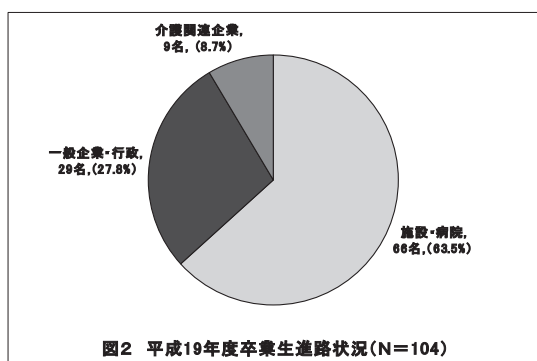
1) 平成18年度卒業生の進路状況（図1）

97名の内、施設・病院91名（93.8%）となっ



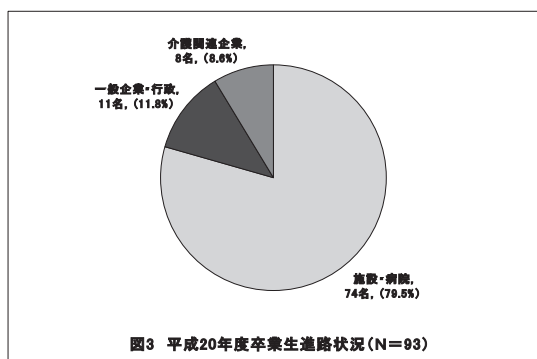
ており、一般企業6名（6.2%）の卒業生が福祉、介護現場には就職していない。

2）平成19年度卒業生の進路状況（図2）



就職した卒業生104名の内、施設・病院66名（63.5%）、介護関連企業9名（8.7%）となっており、一般企業28名、行政1名の計29名（27.8%）が福祉、介護現場には就職していない。

3）平成20年度卒業生の進路状況（図3）



就職した卒業生93名の内、施設・病院74名（79.5%）、介護関連企業8名（8.6%）と

なっており、一般企業10名、行政1名の計11名（11.8%）の卒業生が福祉、介護現場には就職していない。

2. 統計結果からの考察

過去3年間の介護福祉学科卒業生の進路先としては、平均78.9%が施設・病院関係に就職をしていることになる。また、介護保険制度下における居宅介護事業への民間企業参入が著しくなった2000年以降は、介護関連企業への就職も選択肢の一つとして幅が広がり、平成19年度、平成20年度には平均8.65%が就職している。前述との2つを合わせると、8割強の卒業生が実施主体は違うものの、いずれかの福祉、介護現場に羽ばたいていることになる。

一方で、一般企業及び行政に就職したものは過去3年間の平均で15.3%となっている。特に平成19年度卒業生においては29名（27.8%）と他の年度に比べ際立って高いことを指摘することができる。この要因としては、介護福祉職の人材不足が叫ばれる一方で職員に対する過酷な労働条件に比べて安い賃金、社会的地位の低さ等、介護福祉職のマイナスイメージがマスメディア等を通して一般社会にも広く目や耳にすることが多くなった時期であると記憶している。また、2006年度には厚生労働省社会・援護局長の私的諮問機関として「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」³⁾が設置され、介護福祉士制度の見直しがさまざまな形で見え始めた時期でもある。外国人介護士の受け入れという課題も含め介護福祉士の専門性が問われる転換時期であったことが推察される。そして介護現場においては平成18年4月1日から高齢者虐待防止法が施行され、介護現場における高齢者虐待の実状を授業やマスメディアを通して知る機会が多くな

る。厚生労働省が実施した「平成19年度 高齢者の虐待防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」⁴⁾において、平成19年度は市町村における虐待相談・通報対応件数が前年度に比べ飛躍的に増えてきているとの報告がなされている。このような報告結果は、介護福祉現場を敬遠する学生自身に与える影響の材料としては十分である。

Ⅲ. 一般企業、行政職内定及び希望の在学生に対する調査結果

1. 半構造化面接における発言内容のカテゴリー化

一般企業、行政職内定及び希望の在学生たちの発言内容からは、大きく4つのカテゴリーを抽出することができた。

第1は「入学動機」であり、「他者からの助言」「資格の有効性」「介護福祉現場以外での知識の活用」「楽観的な動機」の4つのサブカテゴリーで構成されている。ここでは大学入学以前の気持ちや将来像、周りからのアドバイスといった意見が聞かれている。自分にとって役に立つのではないかという、未だぼんやりとしか見えてはいない将来への期待感もここには含まれている。

第2は「介護福祉実習での体験」であり、「衝撃的な職員の言動」「働き難い施設の雰囲気」「体力的な問題」「精神的な負担」の4つのサブカテゴリーで構成されている。ここでは臨床場面である介護実習での体験を通して感じとった、学生たちの率直な意見が聞かれている。

第3は「周りからの影響力」であり、「周りからの共感的な意見」「周りからの支え」「企業への好印象」の3つのサブカテゴリーで構成されている。介護福祉職を選択しないとい

う自分に対して否定せず共感してくれる、また背中を後押してくれた人の存在、そして企業への魅力もここには含まれる。

第4は「自らの判断の正当性」であり、「知識・経験の活用」「学習・体験への満足」「企業における福祉と介護」の3つのサブカテゴリーで構成されている。介護福祉学を学ぶ大学を選択した自らを肯定的に捉え、大学で学んだ知識や経験を他分野でも活かしていきたいという思いが含まれている。

これら4つの各カテゴリーがどのような内容を示しているのかについて、以下、具体的に説明してみよう。

2. 入学動機（表1）

表1 入学動機

サブカテゴリー	コード
他者からの助言	<ul style="list-style-type: none"> ・性格的に向いていると親にいわれる。 ・高校の教員に勧められる。 ・親に勧められる。
資格の有効性	<ul style="list-style-type: none"> ・資格があれば仕事はみつかる。 ・将来、必ず役に立つ資格と聞いた。 ・福祉人材が求められていると聞いた。
介護福祉現場以外での知識の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係を作る上で大切なことが学べる。 ・どのような場面でも知識は無駄にならない。
楽観的な動機	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉や介護であれば親からの受けも良い。 ・一人暮らしがしたかったから。 ・4年間をかけて自分のやりたいことを見つければ良いと思ったから。

介護福祉士養成校への入学動機においては、「他者からの助言」「資格の有効性」「介護福祉現場以外での知識の活用」「楽観的な動機」の大きく4つのサブカテゴリーを抽出することができた。次に、これら各サブカテゴリーがどのようなことを具体的に示しているのかを述べる。

第1に「他者からの助言」においては、自覚はしていないものの介護福祉職が向いているのではないかと親や高校の進路指導教員から勧められ選択したことが挙げられる。周りの人間に対して優しく気配りができる性格、または誠実さといった評価を他者から受けていることが想像できる。第2に「資格の有効性」では、福祉人材が求められているため将来的に資格さえあれば、容易に仕事は見つけることができるといった就職活動に直結した判断が見えてくる。第3の「介護福祉現場以外での知識の活用」では、たとえ将来介護福祉現場に就職しないとしても、福祉や介護の知識は他の場面でも十分に活用することができるのではないかとこの考えを持っていたとの意見が聞かれた。また、良好な人間関係を作ることを学問的に学ぶことは社会に出てからも有効な知識、技術として捉えている。第4の「楽観的な動機」では、福祉や介護であれば親の受けも良いといった考えや一人暮らしがしたかったとの考えも聞かれた。また、介護福祉現場だけに囚われるのではなく、入学からの4年間で有意義に使い本当に自分のやりたいことを見つけていきたいという考えもここには含まれる。

3. 介護福祉実習での体験（表2）

表2 介護福祉実習での体験

サブカテゴリー	コード
衝撃的な職員の言動	<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉現場が冷たい。 ・職員が上司の文句を言っていた。 ・介護福祉現場がぎすぎすしていた。 ・尊敬できる職員から給料の安さを聞かされた。 ・介護が作業的であった。
働き難い施設の雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・施設理念が自分に合わない。 ・施設が合わなかった。 ・この施設では働けないと思った。 ・雰囲気が自分には合わない。
体力的な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・体力的に自信がない。

精神的な負担	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も将来、冷たい職員になってしまうのではないかと怖さを感じた。 ・排泄物に触れじん麻疹ができた。
--------	---

介護福祉士取得に必修科目である介護福祉実習での体験においては、「衝撃的な職員の言動」「働き難い施設の雰囲気」「体力的な問題」「精神的な負担」の4つのサブカテゴリーが抽出することができた。次に、これら各サブカテゴリーがどのようなことを具体的に示しているのかを述べる。

第1に「衝撃的な職員の言動」では、実習施設の職員関係が悪いため常にギスギスしており、利用者への対応も作業的であり冷たさを感じた等の経験をしてきている。将来、自分もこのような冷たい職員になってしまうのではないかとこの恐怖心を抱くまでに至っている。また、実習中に丁寧に指導してくれた尊敬できる職員から、上司の悪口や給料の安さを聞かされるといった経験をしてきている。第2に「働き難い施設の雰囲気」では、実習施設の理念が自分には合わないと感じてしまっている。そこには自分がやりたいことができない雰囲気があり、このような施設では働けないと思う経験をしてきている。第3の「体力的な問題」では、日頃体験していない長時間の実習に加え慣れない通学方法といった部分での体力的な負担は、彼らにとって非常に大きい問題として挙げられる。また、第3段階で実施された夜間帯勤務が、体力的な負担に与える影響が大きいことは容易に想像できる。第4の「精神的な負担」では、職員による介護に対する否定的な言葉や第2のサブカテゴリーに出てきた意見である施設の働きにくい雰囲気に身を置いているという環境が、さらに拍車をかけることになっている。また介護実習中による疲れや、やらされているという感情があれば、そのことがかなりの

精神的負担に与えていることは言うまでもない。

4. 周りからの影響力（表3）

表3 周りからの影響力

周りからの共感的意見	・「介護はやってられない」と友人からいわれた。
周りからの支え	・親からの反対は無かった。 ・周りの人たちも理解してくれた。 ・介護の仕事は大変であると親が言ってくれた。
企業への好印象	・就職説明会での対応が良かった。 ・他の職種の方が給料が良い。 ・企業説明会で直感的に就職したいと感じた。 ・先輩たちが企業に就職しており話を聞いていた。

介護福祉職を選択しないと決断するまでの過程においては、それまでに周りにいる者から大きな影響を受けていることが考えられる。周りからの影響力においては、「周りからの共感的意見」「周りからの支え」「企業への好印象」の3つのサブカテゴリーを抽出することができた。次に、これら各サブカテゴリーがどのようなことを具体的に示しているのかを述べる。

第1に「周りからの共感的意見」では、同じ学科にいる友人から「介護の仕事はやっていられない」との発言を聞く事で、自分だけではないという気持ちに至り安心できた。介護福祉職に就かないと思うと不安になっていたが気持ちを整理することができるようになったとの意見が聞かれた。第2の「周りからの支え」においては、卒業後に介護福祉職に就かないことに対して親からの反対はなく、自らの決断を支えてもらうことができた。また、介護福祉現場は体力的にも大変であると理解を示してくれたとの意見が聞かれる。第3の「企業への好印象」では、就職説明会に参加した際の担当者の対応がとても良かった、直感的に就職したいと素直に感じられた

との意見が聞かれた。

5. 自らの判断に対する正当性（表4）

表4 自らの判断の正当性

知識・経験の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さまとのコミュニケーション。 ・高齢者、障害者のお客さまとの関わり方。 ・高齢者の住民との関わり。 ・お客さまのニーズ把握。 ・知識や経験を活かして、福祉用具、住宅改修の仕事がしたい。 ・リフォーム希望のお客さまへのアドバイス。
学習・体験への満足	<ul style="list-style-type: none"> ・人のことを考える癖をつけることができた。 ・人に対する勉強ができた。 ・視野を広げることができた。 ・実習では今までは分からなかった自分を発見できた。 ・人を理解する学問を学べたのは良かった。 ・一つの事柄であっても様々なアプローチがあることが分かった。 ・コミュニケーションを学問的に学べたのは良かった。 ・実習では働くことへのイメージができた。 ・さまざまな人たちに出会うことができた。 ・高齢者、障害者の方々と出会えたことは貴重。 ・自分が変わることができた。
企業における福祉と介護	<ul style="list-style-type: none"> ・企業内にもさまざまな福祉が存在している。 ・福祉は介護現場だけではない。

卒業後に介護福祉現場に就かないという決断をした、自らの判断に対する正当性においては「知識・経験の活用」「学習・体験への満足」「企業における福祉と介護」の3つのサブカテゴリーを抽出することができた。次に、これら各サブカテゴリーがどのようなことを具体的に示しているのかを述べる。

第1に「知識・経験の活用」では、企業での営業職に就いた時のお客様とのコミュニケーション技術、お客様のニーズを把握するための技術、高齢や障害を持ったお客様との接し方等、対人サービス業において活かすこ

とのできる知識と経験を積むことができたと感じている。第2の「学習・体験への満足」においては、福祉、介護の学習を通して人間に対する勉強ができた、高齢者、障害者の方々と出会えたことは貴重な体験ができた、人の事を考える癖をつけることができたとの意見が聞かれた。また、学習を通して自分自身が成長し変容することができたとの意見もあった。第3の「企業における福祉と介護」においては、第1に挙げた「知識・経験の活用」ができるのではないかと確信や、第2の「学習体験への満足」に関連し生まれるものであり、企業内にもさまざまな福祉が存在する、福祉は介護現場だけではないという意見が聞かれた。

Ⅳ. 一般企業、行政職を決断するに至る過程の一考察 ～介護福祉職を目指さないと決めた自らの判断～

作山ら⁵⁾の介護福祉専攻学生の入学動機の報告によると、介護福祉士を目指す学生は、「人や社会のために役立つ仕事をしたいから」「やりがいのある仕事だと思ったから」といった志望動機が高い割合で挙げられており、高い志を持って自らの意思で決断しているケースが多いことが示唆される。また、過去におけるボランティア体験や身内に介護が必要な者がいたなどの体験が、将来の仕事へのイメージを創造させることは容易であると思われる。

今回の調査対象者においても、介護が必要な身内の存在や社会的に必要とされる仕事であるという入学動機が存在している。しかし一方で他者から勧められ、就職には困らない等の資格の有義性を感じたり、親に対して福祉、介護の勉強をすることは社会的にも好印

象があるので進学し易いという楽観的な判断も感じられる。また、必ず卒業後は介護福祉職に就こうとする強い意志が存在していたわけではなく、4年間を学習していく過程において本当に自分がやりたいと思える仕事であるのかどうかを判断していきたいという、将来や仕事に対して冷静で慎重な姿勢であったことが窺い知れる。調査対象者からの「将来、介護福祉現場に就職しないとしても、福祉や介護の知識は他の場面でも十分に活用することができる。」という意見からは、社会で生きていくために必要な幅広い学習ができるということが、魅力の一つとして考えていたということが示唆される。

前述のような思いを抱き入学してきた彼らであるが、介護福祉実習におけるさまざまな体験が介護福祉職という将来像のイメージとしての思いを揺らし始める。特に大きな影響を与えるのは、介護実習現場の指導者である職員からであろう。彼らの言動は実習生にとっては生きた手本となり、それは自らの将来の姿なのである。円滑な職員関係を保つことができている職場では常にギスギスした雰囲気を感じ、学生の目には作業的で冷淡な職務姿勢に映り、その場に身を置く実習生という弱い立場にある学生が極度の精神的負担を感じてしまうことは想像できる。そのような働き難いと感じる介護福祉現場であれば、自らの将来をイメージすることはできないのは当然である。筆者が以前に実施した、介護福祉士養成校卒業後2～16年目の介護福祉士117名に対するアンケート調査⁶⁾における「離職を思考した動機」では、離職理由としての質問項目「職場での人間関係が悪い」に65.9%が「ある」と回答している。介護福祉現場における「良好な人間関係」は、魅力ある職場、職種として第一の条件であると言える。

以上のような「否定的な職員の言動」「働き難い施設の雰囲気」「精神的な負担」を経験すること、さらに体力的に過酷であるという状況が、職業を選択する上で「条件に合わない職場環境」として判断していくことに大きく影響を与えていると思われる。

しかし、介護福祉職への強い志を抱いていなかった、または介護福祉職への喪失感を感じたにせよ、自らの判断だけで最終的な結論を出せるものではない。そこには必ず本人が抱く思いを肯定的に捉え支えてくれる、親や同じような境遇にある友人等の精神的な支援者が存在する。

V. 決断後の思い

介護福祉職を目指さないと決意を固めた彼らには、介護福祉職に就かなくて良いという安心感や、目標を絞ることができたと自らの判断の結果に対して、前向きに自らを捉えることができるようになってきている。また、4年間学習した内容や介護福祉実習での経験は決して無駄にはなっていないという意見を多く聞くことができた。これは企業や行政に就業するようになって、対人サービスとしてコミュニケーションを通じて相手との関係を図る上での本質的な部分は同じであり、話し易い雰囲気を意図的に作り相手がどのようなことを望んでいるのかを正しく理解するために重要な傾聴の技術や、その言葉の裏側にある真のニーズを捉えることは十分に今後も活用できるスキルとして学習してきたという自負がある。

介護福祉実習で経験した介護過程では、情報収集、ニーズの把握、計画の立案、実践、評価という一連の過程を理解することは、今後仕事をする上で訪れるさまざまな事象の問題解決を図る方法として、色々な視点からの

アプローチを発想できるという考え方を持つことに繋がっていると思われる。企業、行政に就職しようとする彼らではあるが、その職務に活用できるであろう介護福祉学の価値を見出すには十分である。

一方、介護福祉士養成校に入学したことへの後悔は調査協力者からは聞くことはできなかった。穏やかな大学の雰囲気、温かみのある学生たちが多く好きであるとも感じている。もし、高校生に戻れるのであれば同じ学部、学科に再度入学したいとの意見まで聞かれた。自らの判断を肯定的に捉えることができるようになり、さらにこれまでの学習や体験がこれから十分に活かすことができるということへの確信、また、自らを支えてくれた友人や教員への思いが大学への愛着心となっていることが推察される。

おわりに

本研究は、介護福祉士養成校に在学する学生が卒業後の就職先として介護福祉現場以外を選択することを決して否定するものではなく、決断をするに至る過程に及ぼす諸要因、また彼らの介護福祉学を学んだことへの価値について理解することで、今後の介護福祉士養成の一資料となることを目的としている。

介護福祉職以外の職種を選択するまでの過程においては、彼らのさまざまな思いを感じることができたと考えている。「介護福祉現場だけに囚われるのではなく、入学からの4年間を有意義に使い本当に自分のやりたいことを見つけていきたい。」という調査協力者からの意見からは、仕事に対して一時の感情や勢いに揺さぶられるのではなく、慎重な判断をしていきたいという人生に対するとても真面目な一面が感じられる。また筆者自身、これまで福祉、介護の学習を通して得た知識

は他学部、他学科にはない社会でも十分に重要視されているものであると確信している。例を挙げるとするならば「生活の視点」である。お客様や住民へ良質のサービスを提供する上では、対象者がどのような生活状況にあるのかという関心を常に持つことが重要であると考えている。学生たちは養成カリキュラムの中で、十分にその訓練を重ねてきたはずである。学生が介護福祉学を学んだという誇りと自信を胸に、それぞれが決断した社会においてその力を十分に発揮し活躍することを切に願っている。

-
- 1) 厚生労働省職業安定局：介護労働者の確保・定着等に関する研究会（中間取りまとめ），6，2008
 - 2) 介護労働安定センター：平成20年度 介護労働実態調査結果について（介護労働者の就業実態と就業意識調査），7，2009
 - 3) 東島俊一：新しい介護福祉士の養成と生涯を通じた能力開発～介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会報告～，法研，2006
 - 4) 厚生労働省：平成19年度高齢者の虐待防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果，<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/10/h1006-1.html>
 - 5) 作山美智子，松井匡治：介護福祉専攻学生の入学動機および介護意識に関する調査，介護福祉教育，10（1），30-34，2004
 - 6) 谷 功：介護福祉士養成校卒業者の離職動機に関する研究～介護労働と介護福祉士教育のあり方に対する考察と提言～，日本社会事業大学大学院学位論文（修士）要旨集，41-51，2006